

ね。私もこの九月になると父母が亡くなって丁度四十五年になります。早いものですね。

澱粉かすの思い出

北海道 小川 幸子

昭和二十年九月、江差、熊石と十数日を掛けて主人の親戚を探し歩き、函館在の砂原村に着きました。

八月四日大泊中学校の校庭の見える官舎で、長男「誠五」を出産しました。看護に来てくれていた母は、豊原の実家へ戻ることなく、婦女子、病人に対する強制疎開の命令で、私達親子と行動を共にすることになりました。八月で夏着それも着のままの姿で、荷物を出したという心強さもあり、少量のオムツと嬰兒の着替えだけを手荷物として、北海道へ渡りました。

中学校も三年生以上の者は残り、本土決戦をと上部の人は思っていたようで勿論、主人も残りました。

主人からは叔母の家に行くようにと言われましたが、

なかなかたどりつくことが出来ず、ようように尋ね当てたところ「そんな者は知らぬ」と言われ、途方にくれました。それでも情深い方の納屋に入れて頂き、三人が住むことになりました。

翌日からでも糊口するため働かなければなりません。都合よく蒲鉾製造所で雇ってもらう事が出来次の日より働く日々でした。当時の食糧事情は漁船を持つ人の多くは、本州まで出かけ、魚と交換に米を得ていたので配給が幾日もとどこおっても、さしたる痛みはない風でした。

裸一貫、まさに無一物の私達には大変きびしいものでした。親子三人で一日当たりの米の量は、小さな湯呑み茶碗にすりきり一杯もあつたでしょうか。魚がたやすく手に入られることが最大の幸せでした、大根すぐりを手伝いそれを貰い、うちなりながら大きな南瓜などもあり、どうかいのちをつないでおりました。醤油も味噌も、また食器類など売ってもおらず唯一の調味料としては塩があるだけでした。くる日も、くる日も魚とほんの少しの野菜を入れた塩汁ばかり食べていました。

食器といえば家を出るとき、野宿を覚悟して、米を入れて持ち歩いた飯ごうが二つあるだけです。飯ごうに汁を盛っても、お粥を盛ってもすぐには熱くて持つことが出来ません。(テーブルが台にでも、そんなものはない)干うどん、澱粉などほんの少量配給されたこともありま

す。

あるとき澱粉かすが当たりました。当時農家の家畜の飼料用として冷凍保存をしていたものです。凍ったままですが、量的には大分あるように思われました。でも、解かすと量は半分以下ほどになり、それにまた藁くずやごみ、芋の皮等を除き良く水洗いするとまたまた砂が大量に沈み、口に入れられるようにするまでは随分の手間と暇がかかります。それでも幾ばくかの澱粉をとり、お粥に入れ「ノッペイ」とかにして食べました。

私は七時には出かけ、昼食には戻り夕方六時ごろまでの勤務でした。誠五には朝たっぷり乳を吞ませて出かけ、九時と三時には会社まで母に背負って来て貰う毎日です。丁度そのころには空腹を訴えて道中を大声で泣きながらくるので、近所の人々にあの児の泣声で時刻がわ

かるなど言われたものでした。母があつて、誠五のめんどを見、食事の世話をしてくれたお陰で今の私達があるのです。随分ときがたってから昔がたりのように、例の澱粉かすの話を母がしたものです。あの中にはもろろのゴミの他にネズミの糞までがはいっていて、それを取り去るのに一苦労であったとのこと。とても人間の食物などではなかった。でもそれをお前に話すことは出来なかったと、涙しながら聞かしてくれました。どんなにか母自身も情けなく思われたことか、その母も二年後に引揚げて来た兄の一家と暮らし、三十一年の二月の凍りつく夜に亡くなりました。

今飽食のときにめぐり合せ、何の不自由もなく暮らしているのが勿体なく思われるこのごろです。せめて母にテレビの前に坐らせることが出来たならと思っております。